

# 生徒たちは文法の大切さを理解しているのに、 なぜあんなにも忘れてしまうのかを考える

木村 達哉

## 1. 採点をしながら溜息をつく自分

今まで様々な形で文法の指導をしてきて思うことは、こっちはあんなに一生懸命に授業をしているのに、「どうしてお前たちはこんなにも忘れてしまうんだ?」と思うことだらけの指導歴だったなということだ。最初に教壇に立った学校の生徒たちも、現在の灘校の生徒たちも、定期考査の採点をするたびに私に溜息をつかせてばかりきた。こちらが授業で説明したことが、もの見事にスポンと頭から抜け落ちていくようで、そんなときは自分の授業が徒労に終わったかという虚無感でいっぱいになるものだ。今までそんなことばかり経験してきた。

## 2. 文法の重要性を理解している生徒たち

では生徒たちは文法を軽視しているのかということ、決してそうではなさそうだ。実際に書店の学参コーナーへ行って売れている本を書店員さんに尋ねてみればわかる。単語集と文法問題集が圧倒的に売れている。自分が数年前に出した『ユメタン』(アルク)もおかげさまで年間10万部程度売れているらしい。友人が書いた文法問題集も、基本的なものを中心にして、結構な冊数が売れているらしい。つまり生徒たちも文法は大事だということを知っているのだ。その大事な文法ができない自分をなんとかしようと思って書店に足を運び、本を買っているのである。

## 3. 指導の実際を検証する

つい我々教員はできない生徒たちを目の当たりにしては、できないことを彼らの不勉強のせいにするきらいがあるが、実際に自分の指導を振り返ってみることも必要である。もちろん十分な解説は行ったのであろうし、それに伴ったトレーニングも行ったのだから、本来的には教員の果たすべき役割は完了しているようにも見える。しかし、生徒たちの文法力は伸びず、知識は定着しない。ではその生徒たち

の文法力が伸びている、あるいは知識が定着している先生の指導とはどう違うのだろうか。

いわゆる一般的な文法の授業はこんな感じではないだろうか。授業で扱う文法項目を黒板に書き(比較とか仮定法とか)、生徒たちはその板書をノートに筆写。彼らの机には文法のテキストや総合英語系の参考書などがあるが、積極的にそれを使おうとはせず、ひたすら板書を写し、説明を聞いている。この場合の「聞いている」がlistenであることを祈るが、時としてhearであることも多い。

さて、その説明がひととおり終わるとトレーニングに入る。多くの文法のテキストの右側ページは演習問題のページなので、それを有効利用すればよいわけだが、私のように幾枚も手製のプリントを準備していく先生もおられよう。あるいは別冊になっているワークブックなども併用して生徒たちに多くの問題を(場合によっては宿題という形になるのであろう)解かせる。授業中に答え合わせをする先生もいらっしゃるが、私のように解答冊子を渡しておいて、自分で添削をさせるという先生もいらっしゃるであろう。時間的には後者のほうが有効であるが、それは学校の実情に合わせて行われているはずなので、一概にどちらが効果を上げるかを議論するのは不毛である。さて、ワークブックを週末の宿題などにすると、我々は月曜日に検印を押す仕事に追われたりする。提出状況が芳しくない場合には火曜日の授業で未提出者を厳しく叱咤し、とにかく提出させようとする。ある程度の提出があった後に、くだんの文法の確認テストを行ったりするものだから、生徒たちはそれに向けて一生懸命に勉強をする。しかし、確かにその確認テストではある程度の点数を取る生徒たちも、それからしばらくたって行われる中間考査や期末考査では撃沈するというケースが多々あり、最初に記したとおり、我々はまたぞろ深い溜息をつくことになる。

#### 4. 言語獲得の過程を考える

このおよそ日本中で行われている文法指導に穴があるとすれば1点である。その1点を埋めさえすれば、相当な文法力を獲得できる。それを説明する前に、我々人間の言語獲得過程について考えてみよう。生まれてしばらくはinputに終始する。何か月か経ると、徐々にそれを使って自らoutputしようとするが、母親から「ほら、パパがいまちゅよ」と言われた赤ん坊がいきなり「そんなことよりめっちゃ腹減ったんやけどな」なんて言えるわけがない。言語獲得は常に極めてスローな過程となる。もちろん赤ん坊と中高生の言語獲得の速度や過程が全く同じわけではないのは重々承知であるが、しかし少なくとも先ほど終わった授業で得た知識を、生徒たちがいきなり100%に近い割合でマスターして、使えるようになるかという点、それは無理な話である。まして赤ん坊が2～3年にわたってinputしたものを、数十分の授業で、しかも板書を筆写して演習問題を数題解いただけでマスターできるのであれば、そもそもその授業は不要だったのであり、生徒たちは与えられた参考書や問題集を使って、自分でマスターできていたであろう。つまり、上記の形態の授業では、英語や文法をマスターできなくて当然ということなのである。

では赤ん坊の言語獲得過程に戻って考えてみよう。我々は赤ん坊のときに母親をはじめとする周囲の大人たちから様々なinputを行い、その後知らない間に喋ることができるようになってきた。問題は「知らない間に」である。これを恣意的に作り出すことができれば、生徒たちの文法は定着し、英語力全体がアップする。

では「知らない間に」どういうことを我々は行っているのか。様々な文を作っては失敗し、訂正されながらもどんどん発信し続けているのである。「魚」のことを「さなか」と言ったり、「おもちゃ」と「おもちゃ屋」とを混同したりしながら、「知らない間に」我々は魚のことを間違いなく「さかな」と呼ぶようになり、「おもちゃ」売場で「すみませんが、正月のおもちはありませんか」などと言うことはなくなる。それまでは、失敗することなど怖れずにひたすら文を作り続けるのだ。その過程は小学生や中学生、はたまた大人になっても続く。先日ある国語の先生が「手前味噌ですが、私はこういう失敗をしま

した」とおっしゃっていた。これは「手前味噌」の使い方を完全に間違っ覚えてしまった例であると同時に、国語の教員である彼自身が依然として言語獲得の途上にいることの証しといえよう。

#### 5. 生徒たちの言語獲得はどうあるべきか

我々が授業で解説をして、演習問題やワークブックを解いたりトレーニングブックを解いたりするだけで定着するわけがないのは以上の理由である。つまり本来的に人間の言語獲得はinput→intake→outputの過程をなぞるが、生徒たちの上記の学習ではinput→intakeで終わってしまうのである。確かに英作文の問題も多少は演習問題のページに載っている。しかしその程度のoutputで定着するはずがなく、できるだけ多くのintakeとoutputとを繰り返さないとなかなか脳に刷り込まれることはない。したがって我々教員はこのinput→intake→outputの過程を恣意的に作り出すとともに、intakeとoutputこそ多量に生徒たちに課さねばならないのだ。ところが実際の授業ではひたすら解説すること(input)にエネルギーと時間を割き、intakeとoutputの時間が少なくなってしまいがちである。これでは定着度が低くなってしまふのは当然なのである。

#### 6. 文法授業改革断行

そのことに気がついた私は授業を大幅に変えてみた。教師による解説を極力少なくし、文法のテキストや参考書に書いてある解説を授業中に熟読させることでintakeとoutputの時間を増やした。文法の授業時間の大部分を生徒たちはライティングとスピーキングに費やしている。「では次」と私が生徒たちに発する言葉を聞いて生徒たちは身構える。「もし俺がお袋なら、親父にもっと小遣いを渡すのになって英語で言うてみ」、「よし次な。もし俺が親父なら、もっと子どもに小遣いを渡すのになって英語で言うてみ」などという私の言葉に、彼らはテキストや参考書の例文を最初は見ながら、そのうち見ないでどんどん英語に直していく。授業の大半をこうしてoutputに割いては、英語でいかに表現するかを楽しむ。上の例で言えば仮定法のinputとintakeの後に行うのであるが、生徒たちはそれまでの時間よりも、このoutputの時間をおおいに楽しんでいる。

そしてその中で獲得した(「小遣い」などの)語いを使って、また新しい文を作ろうとするので、文法のみならず単語やイディオムも同時に獲得していく。英語を話したいという生徒の願望を満たしながら行うので、英文法の授業が楽しいのである。当然ながら文法項目の定型的公式(仮定法や比較などで頻出のセンテンスパターン)はどんどん身につくし、それに加えて単語の力もついていく。一挙両得なのである。

## 7. 『5-STAGE 英文法完成』に込めた想いを

私は本当に授業が下手で、なかなか生徒たちに英語力をつけてやれなかったという自戒の念があり、どうすれば英語力がつくのかと、そればかり考えてきた。そして出した結論は極めて単純なもので、単語や文法および読書力といった基本的な力を比較的早い段階でつけ、その上で発信力を意識しながら多読と多聴を重ねるというものであった。ではその単語と文法の基本をどうすれば涵養できるのかと考えたとき、いかに自分の指導がinputに偏り、intakeとoutputが足りなかったかを恥じることとなる。

そんな折、数研出版から「文法の力がつく教材を作りたい」と話を頂戴したものだから、それでは今までの自分の指導を恥じ、その恥を払拭するようなものにしたいと強く思った次第である。この本を創るにあたって、編集者のみなさんとの話の中でお願いしたのは、何よりもこの「徹底的にintakeする」という点と、単にクイズ形式の文法問題を解くことに終始せずに「outputを最終的なゴールとする」という点であった。さらに言うならば「文法を学習しながら単語力をも同時に獲得する」という点はかなり重要なウエートを占めた。出来上がった本を見ていただければ、この「徹底的intake」、**「outputをゴールに」**、「単語力をも涵養する」という3点が十分にわかっていただけるであろう。

## 8. 『5-STAGE 英文法完成』の学習手順

では具体的にどのような学習を行えば基本的な文法力を身につけることができるのかを、『5-STAGE 英文法完成』のコンテンツにしたがって紹介する。

従来の英文法問題集の多くは、最初のページに簡単な解説、その右ページに基本問題があり、生徒た

ちはそれを解きながら解説の確認を行う。その後には和訳・書き換え・4択などの実践的な問題、最後に、さらに発展的な文法問題が載っているが、同じページに様々な形式の文法問題が混在している。このような従来型の文法問題集とは異なり、『5-STAGE 英文法完成』は、input → intake → outputの流れを大切にされた設問形式で構成されている。

本書は、次の8つのステップから成る。

- ① 最初のページに簡単な文法の解説があり、それを読んで理解する。
- ② 基本問題を解く。わからなければ左ページの解説を読みながらでも構わない。(First Stage)
- ③ やや実践的な文法問題を解く。わからなければ前ページの解説や参考書などを参照しながらでも構わない。(Second Stage)
- ④ その文法項目を用いた文を和訳していく。辞書を使っても構わない。(Third Stage)
- ⑤ その文法項目を用いた文を英作していく。できるだけ前ページまでに出てきた表現を使って、単語を入れ替えたものにしていくので、それを参照しながら英作する。(Fourth Stage)
- ⑥ CDを聞いてディクテーションする。その文法項目を用いた文を聞き取ってディクテーションし、さらにそれを日本語に訳す。(Fifth Stage)
- ⑦ その章に出てきた単語や熟語などを一覽にし、単語テストを作っているかどうかわかるかをまずはチェックして、単語テストに臨む。忘れていたものがあれば覚えなおす。
- ⑧ その章に関する勉強法や注意点などのコラムがあるので、それを読んで意識を高める。

## 9. 文法学習を通じて英語力全体を向上させる

以上がこの本のコンテンツであるが、従来のものに比べるとかなりタフであることがわかるだろう。しかしこれらのタスクをこなすことによって、かなりの文法力が身につくことも理解していただけるだろう。

また、それぞれのStageにおける目標が明確になっている点もご理解いただけるのではないかと。例えばThird Stageでは実際にその文法項目を運用して日本語に直す力を身につけ、Fourth Stageでは本来のゴールであるoutputの力を身につけ、Fifth Stageではリスニング力を涵養し、さらに単

語力を身につけようとするページが最後にあって、単語テストができるようになっていて、タスクがばらばらに混在していた従来の問題集とは違って、ページごとの目的を明確にしたつもりである。

要するに文法の学習をしっかりと行うことによって英語力全体を向上させようとしているのがこの本なのである。

## 10. どのような英語学習者を育てるか

いささか宣伝めいた内容になってしまって恐縮ではあるが、私が考えた文法学習に対する想いについては読者の先生方にご理解いただけたのではないだろうか。教員になってからずっと「文法の授業はどれも無味乾燥なものになってしまう」と感じていたのだが、自分の授業改革を数年前に行って以来は、むしろ読解などの授業より文法授業のほうがアクティブで、生徒たちはいきいきしているように思う。特に最近私が彼らに課す日本語が身の回りの内容であったり、彼らの進学や将来に関する内容であったりするので、生徒たちは真剣に output 活動を行っている。やはり英語は話してナンボだなと思わざるを得ないし、その点では以前の自分の授業スタイルは非常に不完全なものであったと反省しているのである。

日ごろの指導の中でつい見落としがちになってしまうが、我々英語科の教員は英語のできる生徒たちを育成するために存在する。決して難関大学に何人合格させるかを競うために仕事をしているわけではない。世界に通じる言語を使って指導を行っているのである。ところが指導の中でどうしても大学合格を意識しすぎるがあまり、穴埋めであったり並べ替えであったり4択であったりといった従来型の文法指導に終始してしまうのである。もちろんプロセスとしてそれもアリなのであるが、それができたからといって、その生徒に文法力がついたとは限らない。例えば卑近な例を挙げよう。ある生徒が次のような英語を書いたとする。

Yesterday, I come to Hakata and see a lot of people. I have enjoy myself with them here. 確かに間違った英語であるし、それを訂正してやることは必要であろう。しかしこの生徒は本当に英語力がないのであろうか。

では次に日本に来て少したつアメリカ人のピータ

ー君に登場してもらおう。彼は我々に次のように話したとする。

「昨日、私、博多にきます。そして多くの人たちと会います。私、とても楽しかったですよ。」

この日本語を聞いて眉をひそめる人は少ないのではないか。場合によっては「あなた、日本語がお上手ですね」と声をかける方もいるかもしれない。しかし前述の生徒の英作文同様に間違っているのではないか。なのに前者は否定され、後者は肯定されるのである。どこに違いがあるのかは考えて頂くとして、私自身は文法の学習の目的を「比較的洗練された正確な英語を喋ったり書いたりできるようになること」と思っているのだから、先ほどの日本人の英作文はかなり出来がよいと思っている。そして少しだけ手直ししてやった上で、同じような文を作る練習をさせれば飛躍的に伸びるのではないかと思っているのである。

子どもたちが文法学習でつまづいてしまって英語に対する興味を失うどころか恐怖心をもってしまい、自分は英語ができないという劣等感とともに学校生活を過ごしているのだとすれば、それは非常に残念なことである。そもそも英語という新しい教科を学ぶことにはワクワクした気持ちがあったはずで、いつのころからか「覚えなければならない」という恐怖心が前に出てしまって、「英語はツマラナイ」とのたまうことになりかねない。しかし我々教員の意識が「世界に通用する人材の育成」に向いていれば、自ら文法学習のみならず単語や読解の指導法も変わってくるのではないだろうか。依然として音声CDを使わず、発音記号だけを当てにして単語を覚えている子どもたちが決してリスニング力を伸ばさないと同様に、outputを意識することなく文法学習を行う子どもたちが、英語の面白さ、つまり英語で新しい文を作る面白さを体験できるわけがない。文法学習こそその興奮を彼らに直接的に伝えられる絶好の機会なのだと、私は信じている。そしてこの『5-STAGE 英文法完成』で学習した生徒たちが、世界を舞台に活躍する人材に育つことを、心から祈念している。

(灘中学校・高等学校教諭)